

西脇

びだいにんアインシンヌタインを読んで

一年二組

スイーフ

瑠璃

相対性理論

それは、

アルバート・アイン

ン

シニタインが発表した、今までの科学の常識

を改めず大理論です。

私は、アルバート・アイン

イト・アインシニタインといふ名前や、物理

に五論に

学の基本となる「相対性理論」という名前や、物語

にかがる

つひこ聞いた事がおりましたか、アインシニ

タイン博士がどのようなく生を歩んだのか、

興味があり、もと知りたかったいふ思ひが

タイン博士は、アメリカの発明

この本を読む事に決めました。

アインシニタイン博士は、アメリカの

王エジソンが白熱電球を完成させた年の一八

七九年ドイツのウルムに生まれたそうです。

私は、大天才の少年期は、きっと学校でも優等生だ、たどうと思、こいよじたが少し遅

いました。実は「アインシニタイン博士は、

小学校が嫌いだ、ためです。少年時代のアイン

シニタイン博士は、当時の男の子達の間で

流行っていた戦争ごとに仲間には、けいじ

て火ひがひ、ひとりで窓の外を見てほん  
やうじながら考へてたきうです。何を考  
えていたかと云うと、たくさんの疑問だらけで  
す。例えば、なぜ一日には昼と夜があるのが  
歩けるのか?なぜ、ネコは静か  
に歩けるので、アインシュタイン博士は、  
なぜなぜぼうやと呼ばれていたのです。  
でもなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜなぜ  
になつたのが分かりませんが学校を嫌い  
た。アインシュタイン博士が入学したニュ  
ヘンの小学校は、夫則第一が暗く重苦しい  
雰囲気にみちあふれてしまひました。  
授業も、口記ばかりで、自分で考へるることは  
ゆるさず、質問するなどされないとい  
たのですが。そんな小学校の事を軍隊そくくり  
だと云う、ていたようですが。私は学校が大好き

だけど、もし一人な小学校へ行つていたら、  
きっと「エインシェタイン博士のエラに、嫌い  
になつていたかもしません。ただ、学校が  
嫌いとは言え、勉強まじめ嫌いになつたわけで  
はないので、下校してくると、舌書きをひき、  
本を読み、自分の好きな勉強を深めていきます  
した。たくさんか疑問や興味のある事につい  
て、意欲的に勉強に取り組んだ幼少期のアイン  
シュタイン博士の努力の積み重ねや継続す  
る事です。アインシェタインが生まれた  
のだと思ひました。そんな人だからこそ、物  
理学の基本となる「相対性理論」を發表し、  
宇宙の法則を解明していったのだと思ひます。  
私は、このような大理論を發表した有名人  
だからもしかたら鼻が高くなかつてゐるの  
ではなく、かく思ひながら読み続けてしまふと、  
千々一リツヒ大学で助教授として活躍してい  
た時の事が書かれています。アインシェタ  
イン博士は、たいへん人気のある先生だつた  
ようですが、熱心な方がい学生たちを、こゝね

いに指導し、兄の父ラにしたわれて、ました。  
授業が始まる前には、必ず、つなにが監視は  
?レとたずねるのが決まりで、どんながんば  
んな問いにモテ、ないに答え、学長にも難用  
をする女性にモ、同じよう、に、誠実な接し方  
をするアインシニタイン博士は、教授仲間か  
らも尊敬され、いたもうべす。私は、アイン  
シニタイン博士の授業を受ける事が、キ、大學  
生達は、本当に幸運だと思します。大天才が  
のに、ひばりが、謙虚なユーモアあふれる性格  
だ、大アインシニタイン博士、この本を売  
前に思ひえが、私、いた印象とは全く違ひまし  
た。そして、伝記のながに生きる遠くまざし  
い存在だ、アインシニタイン博士を見しく  
感ひふことができました。

## 僕の戦うベギリング

メイバー

灯和

僕は、14歳（千原ジユニア）と言う本を読みました。この本は、お母さんに紹介され、それをきっかけに読み始めた本です。僕は、この本を紹介された時、正直あまり読みたくないませんでした。でもお母さんがとてもいい本だと言うので、嫌々読み始めました。

この本は、14歳の少年が部屋に力技付け、引きこもり始めた話です。みんなとは少し違

う少年と「普通」を求める大人、それにに対する不満や焦りを抱えた少年が自分探しの旅に出る実話をベースにした話です。

この本で僕が一番好きな登場人物は、千原くんのおばあちゃんです。僕が好きな理由は、引きこもりの千原くんを一切軽蔑せず、人間として千原と会話してたからです。僕は、この二人のほうこりする会話を聞いて、癒されました。この本は千原くんを見下したりする人がほんんどで、おばあちゃんみたいな人は

左が左か居らす。千原くじにとてとても大切左人左人だと思しまじだ。僕にもとても大好き左おばあちや人がいます。僕のおばあちやんも僕を叱る時は僕を見下さず、人間として説教してくれます。だからこそ僕は千原くじがあばあちや人のことを好きな理由がより良く分かってんだと思います。

僕はこの本を読んで、改めて「普通」とは左んだろうと考えさせられました。みんなと同じことが本当にいいことなのか、僕も分からませぬ。ただ、一つ分かることはある続けることです。僕には好きな名言があります。  
「人間は考えるために生まれている。ゆえに人間は、ひとつときも考えないことはいられない。だからどうせ考えろ左ら、考えられなくなろその時まで大事なことを考えていたいと思いました。

「左せあなたたちは学校に行くのですか?」  
僕はこの言葉に考えさせられました。今の僕

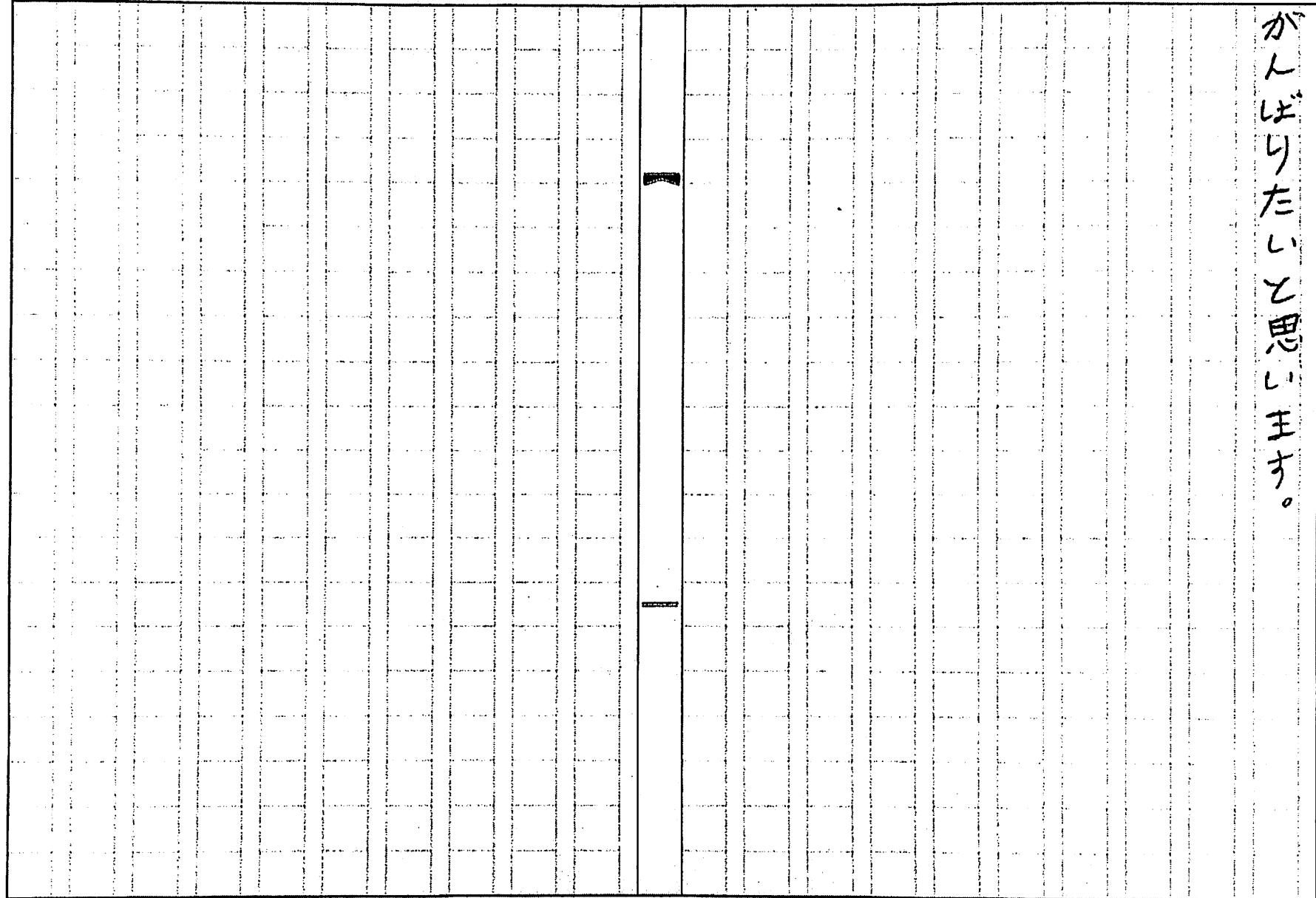
からたらん友達と話すためか授業が楽しいから、と答えると思はず。ただそれが学校に行く理由でいいのかつ学校に行く理由は人それぞれをそれでいいと思ふのになぜこの質問が人に残るんだろうかたぶんこの質問に僕が納得出来る答えが出るには、僕の戦うべきリングを見つけないといけないと思ひ出した。

最初はあんまり嫌々読み始めたのに、こんな左し考えせさられることは思いもしませんでした。この本は、僕みたいな中高生におすすめ

です。なぜかといえばこの本の主人公は、人なつことで悩んでいます。僕たちが普通では悩まないことも改めて考えさせられます。この本が教えてくれたことは、人それぞれに戦うべきリングが違うからみんなと盛りても見下さず、それを受け入れることが大切だと思いました。

「なぜあなたたち上学校に行くのですか?」この質問が答えられないまで答えることを止めず、これをからくたくさん壁を乗り換えて

がんばりたいと思ふ。生す。



20×20

夏目漱石の作品の「こころ」は全部で三部あります。それは、上・「先生と私」、中・「両親と私」、そして下・「先生と遺書」です。「先生と私」では、大学生の「私」が夏休中に先生と出会うところから始まります。先生な寡黙な人で、あまり自分のことを話したがらません。「私」は、先生のことを知れば知るほど惹かれていくのです。「両親と私」では某日、「私」が先生に仕事先の紹介をしてもらうために手紙をおくります。返ってきた手紙は膨大な量でした。第三部の、「先生と遺書」は、この手紙の内容です。手紙には、先生の過去が記されていました。

大学生だった先生は、ある日自身の幼馴染のKが養家から勘当されて困っていることを知ります。先生は、自分が滞在している素人下宿に、Kを招き入れました。そのうちに、先生は下宿を切り盛りする奥さんの一人娘のお嬢さんに恋心をいだきます。それは、Kには秘密でした。先生は悩むうちに、突然Kからの自白を聞かされます。彼もお嬢さんが好きだったのです。Kは、「迷っているのだ」と言います。Kは、自身の生き方について迷っていたのです。そして、覚悟ならばないこともないと語ります。それを、お嬢さんに告白する覚悟だと勘違いした先生は焦ってお嬢さんの結婚の申込みをしました。Kにいつどうやって弁明するか迷った夜、Kは突然自殺してしまったのです。聞けばKは、奥さんから婚約のことを見いたらしいのです。先生は、お嬢さんと結婚し、表面上は幸せそうでしたが、裏ではKへの罪悪感から、自身への愛想をつかしていました。そして、十数年後に明治天皇が崩御したと聞いたとき、とうとう自分も自殺する覚悟を決めたのです。

明治時代は、日清・日露戦争や、西洋文化が入ってくる影響で、物事の価値観や考え方が大きく変わった時期でした。「こころ」の、先生やKはそんな時代に生きていたのです。

「あなたにも私の自殺する意味が明らかに飲み込めないかもしれません、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから致し方ありません」

これは、先生の手紙の一部分です。私は、Kが自身の生き方を変えられず、時代の価値観とあわなかった事が彼の自殺の要因の一つだと考えます。漱石がここで伝えたかった事は、人の生き方は時代によって大きく影響されると言うことなのだと思います。

Kの覚悟について、Kと先生の間では大きな誤解がありました。Kは、自分が恋愛というものに人生を振り回されていた自分が嫌でした。彼が理想とした生き方は、恋などに振り回されず、精進して生活することでした。彼の意思は強く、たとえ欲や恋、更には命も自分の道を妨げるならば犠牲を払う事を厭わなかったのです。

つまりKの覚悟と言うものは、お嬢さんを諦めて自分の理想の道を歩いていくことでした。しかし、先生が解釈したKの覚悟と言うのは全く逆であり、それは理想を諦めて今の自分を受け入れるという事だったのです。Kは理想を貫くために、自殺したのです。私にとって、

この覚悟というものは読み取るのが難しいように思えました。読み取るのが難しいからこそ「こころ」は深いのだと考えます。

また「先生の遺書」では、先生の利己心が顕著であったり、打算的なところが見られます。例えば、Kが自白したあとにお嬢さんに結婚を申し込んだ場面などのところです。先生の根は、穏やかで優しい人だと感じます。しかし、Kへの劣等感とお嬢さんを取られるかもしれないという焦りで卑怯な手を使ったのです。この人間のエゴは、誰でも持っているのだと思います。その計算に、影響される人も多いです。このような利己心とその影響というのはどうしても人間らしいものだと私は思いました。「こころ」では、人間の生き方は時代によって変わっても、卑怯なところや打算的な部分は人間の性なのだから変わらないと言うことを描写しているのだと私は捉えました。

私は、「こころ」を読んで、その心情表現の繊細さに驚かされました。

「私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものなのです」

これはKが自白したときの、先生のモノローグです。化石は、動植物の骨を保存する、生きた屍のようなものだと思います。一瞬にして固まった先生を化石という言葉で表現するのはうまいなと感じました。また、心情に伴う感覚表現も緻密に表していて印象に残りました。

「こころ」には、伏線も時々貼ってありました。例えば、「先生と私」のところで先生は、「恋は罪悪です」と言います。このセリフは、後に「私」が知ることになる先生の過去の経験からきた言葉だということがわかります。「上」で伏線を貼って、「下」で壮大な伏線回収をしたのは読者を離さない大きな理由の一つだと思います。

「こころ」の題名は平仮名です。なぜ漢字ではなくてひらがななのだろう、と私は疑問に思いました。「心」は、心臓という文字の一部なので、漢字だったら物理的な印象になるのかなと考えました。平仮名であれば、物理的ではなくて、人の生き方、考え方なども含めた意味になると思います。また、「先生と遺書」では、先生は今まで秘密にしてきた自分の過去をさらけ出しています。先生の心が「裸」になったことにより、題名が平仮名になったのではないかでしょうか。

名前：小澤伶奈（高1）

## 題名：「スマホ脳」を読んで

現代では、スマホはかけがえのないものとなっている。子供から大人まで、何時間も眩しいスクリーンを見つめるのが習慣となった。このような強い影響力を持っているスマホについて、私は詳しく知りたかった。アンデシュ・ハンセンの「スマホ脳」では、スマホが人間の脳に及ぼす影響力を読者に分かりやすく説明している。本には、脳の仕組み、ソーシャルメディアの影響力、体への負担、対策法などの点が含まれている。

本書で最も印象に残ったのは、筆者が「人類が現代に適応できない」と、述べていたことだ。人間の脳は社会の変化に追いつけず、様々な支障が起きているようだ。

最初は、どのようにこれがスマホに関連しているのかが理解できなかった。内容で出てきた例について話そう。サバンナに暮らしている女性が二人いる。一人目の女性、カーリンは、果実を一個食べると、満足してその場を去る。お腹が空いたら、再び木に戻って果実をさらに一個食べる。毎日、何かしらの食べ物を摂らないと体がもたないのだ。

二人目のマリアは、甘い果実を食べると、脳にドーパミンが大量に分泌される。ドーパミンは、満足感を感じさせて、その行為をもっとしたいと思わせる物質だ。結果、実のなっている木を見つけると、激しい欲に襲われ、実を一気に全部食べてしまう。次の日、食べ物が見つからないとしても、前日にたくさん食べたので、身体に残ったカロリーで生き残れる。サバンナの生活を想像してみれば、マリアの方が生き延びる確率が高いということが分かる。

では、環境を現代社会に変えてみるとどうなるのだろう。二人の女性が、ファストフードの店に食べに行ったとしよう。カーリンはハンバーガーを一個注文し、満腹になつたら店を去った。次に、マリアはハンバーガー、フライドポテト、ソーダ、アイスクリームを食べた。歩くのが辛いほど満腹になって家に帰った。時間が経つと、マリアの体重は増加し、糖尿病と診断された。サバンナでは、マリアの方が有利だったが、現代社会では逆だ。

このように、人間は昔のサバイバル戦術を引き継いでいる。環境が短い期間で大きく変化してしまい、身体が追いついていけない様子だ。

ジャンクフードのような簡単に手に入る食べ物が原因で、肥満問題が起きていることは知っていたが、私たちの先祖から引き継がれてきた脳の働きが影響していたとは、思いもよらなかつた。このように、本を読み続けていくうちに、筆者の言葉が納得できるようになった。筆者は、冒頭から「スマホ脳」という主題に突入するのではなく、初めに人類の歴史から語っている。そこから、上手くスマホの影響力に流れを繋げていくのは、見事だ。

この本を読んでいた時、私が共感できた場面がたくさんあった。例えば、スマホの画面を下にして宿題に集中しようと決めてても、5分もたたずく間に触れてしまうこと。友人からメッセージがきてないか、ソーシャルメディアで何か起きてないか気になって仕方がないのだ。常に「早くスマホを手に取れ！」と、脳が言っているみたいで恐ろしい。この読書感想文を書いている最中にもあった出来事だ。

現代では、テクノロジーを避けるのは難しい。学校の宿題、親や友人との連絡、ニュースの情報、これら全て、スマホで済んでしまう。私は、このままスマホに頼りすぎてもいいのかと思う時がある。どこに行っても、スクリーンを見つめる人々。家族と食事をしていてもスクリーンを見続ける人々。私達の価値観は、これからどうなってしまうのだろうか。とても寂しい気持ちになる。

「スマホ脳」は、日々の暮らしでテクノロジーと接している人には興味深い本だと思う。スマホは、どのように人々を反映するか、これから気を付けなければならないことは何か、と考えさせられる。使用している道具や商品のメカニズムを理解すれば、それに依存しにくいのではないか。私は、精神科医でもあるアンデシュ・ハンセンが勧める対策法を基に、スマホへの依存心を弱めたいと思う。運動量を増やして、集中力を高めるために努力したい。スマホが今後自分の暮らしに悪影響を及ぼさないものとなってほしいと願う。

題名：描く。

「美術は面白いですよ、自分に素直な人ほど強い。文字じゃない言語だから」。今まで読んだ本の中で、一番共感したと言っても過言ではないセリフだ。山口つばさ先生作の『ブルーピリオド』は、美術に出会い、生きがいを見つけた矢口八虎に焦点を置く。物語は芸術を追求し続けた結果表れた様々な葛藤を乗り越える彼の姿を描いている。

幼い頃から絵を描いている身として、このシリーズを知った瞬間、読みたくて仕方がなかった。私は小学校低学年の頃から友人とイラストを描いていた。そのため、「ちひろちゃん可愛い絵描くよね」とよく言われ、いつからか「ちょっと静かな絵が上手い人」とクラスや学年に認識された。高校に入ってからもその印象は変わらず、私はずっと絵を描く人として周りから知られている。実際、その印象に間違いはない。前述で述べたように、幼稚園生の頃から絵を描いたり塗り絵をするのが大好きだった。将来アート関係の仕事に就きたい訳でもないが、今でも絵を描き続けている。

だが、いつからか絵を描くことに喜びを感じることが減っていった。年を重ね他人の作品に触れるにつれ、自分の絵を他者と比較することが増えた。自身の作品の未熟さ、下手さ、思うように描けない苦痛をひしひしと感じた。

事実、その苦しみをばねに努力できていた時期もある。寝る間も惜しんで絵を描き続け、新しいものにも挑戦し始めた。例を挙げると、アルコールマーカーや水彩絵の具を使ってみたり、アニメーションに手を出したり、人間や動物の体の構造を学んだり。自分の絵は好きになれなかつたが、描くことが楽しくて、気持ち良かつた。線が躍っているように感じたのを、今でも覚えている。

しかし、そんな時は颶爽と過ぎていった。時間が経ち、鉛筆を動かすにつれ、できないことばかりが目につく。体のバランスがおかしい。手が上手く描けない。思うように雰囲気を表現できない。表情が硬い。自分の絵が周りと劣っていることは嫌というほど分かっている。だからこそ努力しなければいけない、にも関わらずやる気は一向に出ない。友人に絵を褒められても、信じることができなかつた。「愛想なんて求めてない、お世辞なんていらない。こんな汚い絵、見られたくない。自分が一番見たくなかった」。そんなことばかり考えていると、「自分は絵が下手だ」という認識が頭から離れず、練習をするやる気が出るわけもなく、だらだらと満足のしない絵を描き続けていた。

けれど、『ブルーピリオド』を読んで、忘れていたことを思い出した。絵を描くということは、言葉だけでは表現しきれないものを描写することだ。「文字じゃない言語だから」。つまり、絵の本質というのは、何かを「伝える」ということ。「どんなに技術があっても情熱のないものは人的心に響かないんですよ」と美術部の顧問、佐伯先生が言っていたように、どれだけ「上手く」描けるよう努力しても、画家が感情を込めて描かなければ意味はない。

「好きなように絵を描いていいんだ」、そう思えた瞬間、気持ちが楽になった。表面的な見栄えに気を取られて、自分の想像力を縛っていたのかもしれない。現実に名画と評価される作品で、顔のバランスがとれていなかつたり、単純にキャンバスに絵具をぶちまけた様な絵画は数多く存在する。それでも芸術作品であることに変わりはなく、どれも立派な「絵」だ。理解されなくたっていい、片足がでかくとも、指が7本あってもいい。感情や思考によって、描く線一本一本が太くなったり、鋭くなったり、丸っこくなったり。時には色彩が明るくなる時もあれば、濁ったような色合いに変わることもある。これほどまでに自由で面白い自己表現の方法が他にあっただろうか。「あなたが青く見えるなら、りんごもうさぎの体も青くていいんだよ」と言った佐伯先生。『ブルーピリオド』を読んで、絵を描くことに新たな可能性と楽しみを感じることができた。

自身の美術への愛を改めて再確認できたところで、同じ愛をまた別の人にも広めたい。「作った本人が好きで楽しんで情熱を込めて作ったものってね、それを見た人も楽しくなっちゃうものなんですよ」。是非『ブルーピリオド』という芸術と情熱に溢れた作品とともに、鉛筆を握って思いっきり自分を描いてほしい。